

子どもの転落事故 「うちの子に限って…」は通用しません！

2025 年6月 24 日、住宅の窓及びベランダからの子どもの転落事故の調査結果を取りまとめた報告書を公表しました。

■ なぜ事故が起きているのですか

窓からの転落事故 42 件、ベランダからの転落事故 92 件が発生した住宅の環境を分析しました。その結果、窓及びベランダからの転落事故のいずれにおいても、7 割以上の住宅で足掛かりが関係していることが分かりました。足掛かり以外にも含めて、下記のような状況が分かりました。

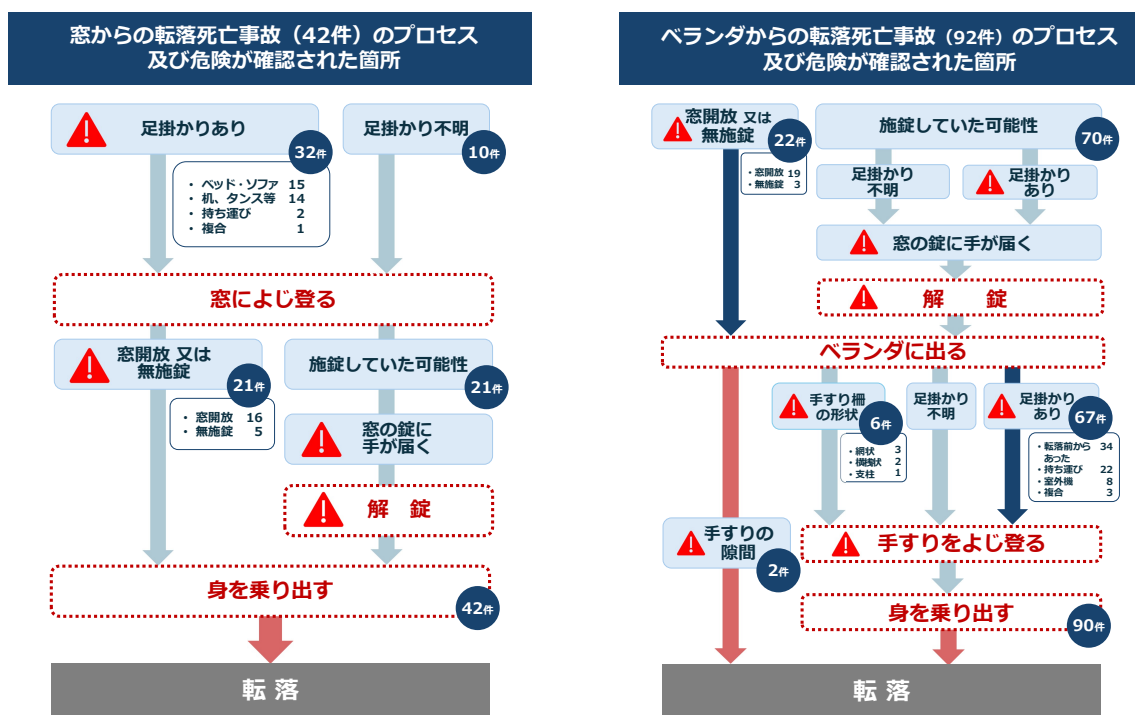


図 転落死亡事故のプロセス及び危険が確認された箇所

■ 事故の再発防止のために消費者安全調査委員会は何をしたのですか

国土交通大臣には転落事故防止対策が含まれているガイドライン（子育てに配慮した住宅と居住環境に関するガイドライン（改訂版））の事業者等への普及、転落事故防止対策をした住宅の新築・改修支援等、経済産業大臣には関係団体への子どもの転落事故防止対策のための製品の研究・開発の働きかけ、こども家庭庁には転落事故発生プロセス及び転落事故防止方法の保護者等への周知啓発をするよう意見しました。

子どもが転落に至るプロセスの動画、事故防止のためのチェックリストを公開！

[動画&チェックリスト](#)



国立研究開発法人 国立成育医療研究センター
副院長、救急診療部統括部長

植松 悟子 氏



■ 1人の転落死亡事故に対して4人の生涯後遺症

0～17歳の事故には外傷のピラミッドという構図があります。外傷で死亡する子どもを1とすると生涯後遺症が残るのは4、入院するのは37、外傷のために園などを休むのは690と言われていて、転落（墜落）事故で死亡した子どもが1人いたらその4倍の4人くらいは重篤な後遺症を残している可能性があるのです。高いところから落ちて、下がアスファルトの場合には後遺症を残す危険が高くなります。脳挫傷、脊髄損傷などで麻痺が残る、骨盤を骨折して歩行に影響が出るなど元の能力に戻らない機能障害が残ってしまうこともあります。

■ 親の見守りだけで防ぐことはできないー「あっ！」と思った0.5秒で事故は起きている

親が見守っているだけで事故を防ぐことはできるのでしょうか。親が熟睡しているときに事故が発生する可能性があります。料理をしたり、トイレやお風呂に行っているときもあります。人間が24時間ずっと子どもを見ているなんて無理な話です。「あっ！」と思った瞬間に事故は起きます。その時間は0.5秒、そのうち親が気付くまでが0.2秒と言われています。残りの0.3秒で親が事故を防ぐことは極めて困難です。つまり、親が子どもを見守っていても事故は起きてしまうのです。

■ 三つのE「Enforcement」「Environment」「Education」

子どもの事故を防ぐ原則は、三つのE「Enforcement」「Environment」「Education」です。

Enforcementでは、国土交通省の子どもの安全を考えたガイドライン、新築や改修のための金銭的な補助制度があります。ただ、こうした制度をそもそも知らない人も多いように思います。住宅に関する事業者が「こんなに安全なんだ」と子どもに安全で、子育てに優しい住宅をアピールして、それを保護者が選択できるようになればよいと思います。

Environmentでは、製品による住環境の改善が重要です。「窓の下にベッドやソファを置くな」と言っても、今の日本の住宅の間取りでは他の場所に置くのが難しいこともあるかと思います。窓の下にベッドやソファを置くのであれば窓を開けるのを制限する製品を設置する、室外機を手すり柵から60cm以上離せないのであれば子どもが室外機に乗ることができないように柵で囲うなど対応策を考えることが大事だと思います。

Educationは、最も難しい問題かもしれません。ガイドラインにある数値の基準などは昔から言われてきたものです。医療の世界で子どもの事故予防を取り上げられる機会は増えてはいますが、具体的にどのような事故が発生していて、どのような対策をすべきかまで知らない医療関係者もいます。小児科医や保健師も知識をブラッシュアップして、例えば、健診時に子どもの年齢に応じたアドバイスをできるようにしておくことが重要です。保護者側では、自動車を買うときは安全な商品かどうかをきちんと考えて選んでいると思います。住宅も同じように子どもに安全かどうかを考えて選ぶことが重要です。

■ 大人が子どもを守る社会へ

事故が発生すると親を責めることがあります。しかし、「親が見ていなかったから」と親を責めるのは事故予防ではありません。親を責めるだけでは親が子どもを産み育てることに萎縮し、子どもを公園に行かせない、外に出さない、家の中でゲームしていればよいという社会になってしまいます。

9割以上の家庭では転落で子どもが死亡する事故は発生していません。要因は正確には分かりませんが、保護者が子どもを気にしたり、日本が安全な社会に進んできたからだと思っています。事故が発生すると今までが全部ダメだったかのような言い方をされますが、9割以上の家庭で死亡する事故が発生していない事実は大切にする必要があります。

ここから残り1割の事故を減らすのは簡単ではありません。保護者だけの責任ではなく、設計、建築に関わる事業者、小児科医など大人の責任として受け止め、事故予防に取り組まなければなりません。このような意識を底上げし、大人が子どもを守っていく文化を創造していく必要があります。道で転んでかすり傷を負った程度の小さな失敗には寛容である一方、死亡や重篤な後遺症のような大きな失敗が発生しない社会になってほしいと思っています。